様　式　C－19、F－19、Z－19　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 26 年　 6 月 19 日現在

機関番号：３３９２９
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１３３０１７５

研究課題名（和文）授業分析における記述と解釈の妥当性に関する実験的研究

研究課題名（英文）The Functions of Description and Interpretation in Lesson Analysis: An Experimental Study on its Validity for Pedagogical Factors

研究代表者
的場　正美（Matoba, Masami）

東海学園大学・教育学部・教授

研究者番号：４０１４２２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　11,500,000円、（間接経費）　3,450,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、次の課題の解明を通して、記述方法と解釈方法の授業諸要因を抽出する妥当性の解明を目的としている。(1)記号による発言の記述と思考の関係の解明、(2)記号による記述の可逆性の検証、(3)動作の記述可能性、(4)分析単位の機能、(5)記述形式における解釈の明示性。
結論として、次の点が明らかになった。子どもの発言は46の記号によって再構成され、中間項と呼ばれる一般的な概念と特定の発言の関係を表現する方法が開発された。分析単位は解釈者の重要と判断した意味単位で区分される。解釈は記号を用いた記述言語としての中間項に明示される。

研究成果の概要（英文）：This study is designed to clarify the validity of existed description and interpretation methods from pedagogical perspective as well as develop an alternative tools. The main research points that clarified through this study are as follows:1) Relationship between description way and how using symbols/codes (signs) and thinking way of students, 2) Reversibility of the description using signs for remarking of students learning activities, 3) Description methods of action during teaching learning process, 4) Clarifying functions of units, and 5) Expression of the interpretation with the description form.
From this study it can be concluded that it is possible 1) to arrange students remarks with 46 signs and develop to express the diverse relation of particular expression to a general idea referred to as intermediate factors, 2) to divide units for analysis based on their meaning, and 3) to express the way of interpretation in description form using signs.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育方法

キーワード：授業分析　授業研究　記述言語　中間項　解釈　分析単位　解釈の明示性　概念化

１．研究開始当初の背景

（１）記述と解釈に関する研究動向

①日本における伝統的な授業逐語記録は、発話者、発言番号、発言内容からなる記録である。発言内容は途中での笑いや沈黙、あるいは非言語的行動である挙手は（　）で示されていた。また、板書や実験を写真やスケッチで示す事例もみられた。

諸外国、例えば、ドイツにおいては発言者と発言内容を記述し、発言番号ではなく行（ライン）の左右に通し番号がふられることが多い。Hans=Werner Kuhn(1999)は、授業記録と事後の反省の記録を相互に参照できるようにそれぞれの記録に生徒の反省、教師の反省、および記録の欄を作成し、そこに頁を記述する方式を開発した。

2008 年以前において、エスノグラフィーと談話分析の影響を受け、笑い、ポーズ、割り込み等の記号を用いた記録が作成されるようになった。

②人工知能学と言語学の分野で、言語の記述に関する研究がある。第 1 に、書きことばや話しことばを大規模に収集し、それに検索が可能なように情報を付加したコーパス研究が蓄積されている。第 2 に、日本語の話し言葉は文末表現が常に安定的に得られるとは限られない状況がある。話し言葉のテキストから＜節単位＞を認定し、境界のレベルを設計する研究がなされている（丸山　2008)。第 3 に、スラッシュ単位(森　2007)、談話セグメント（竹内　2008)、隣接ペア(伝　2008) など分析単位の基準の研究がなされつつあった。

③授業分析におけるテキストの解釈の問題については、ドイツにおいて展開されてきた。H. G. ガダマーの解釈学を授業分析に応用した授業研究（H. W. Kuhn 2006）などの研究がある。

④発言表を用いた研究（中村　1987)、子どもの表現した音を記述する形式の開発（小島　991)、沈黙の意味の解明（刑部等 2002）等、授業分析における記述言語ないし記述形式に関する研究がなされていた、

しかし、上記の研究には、いつかの課題が存在する。第１は、すでに記述の段階において解釈が含まれているので、分析単位、記述の形式性、解釈の３者の関係と解釈に対する記述の形式性の妥当性の検証が必要である。第２に、分析単位は研究の意図によって選択されるので、研究の意図に対する分析単位の妥当性の検証が必要である。

（２）研究の課題と着想

本研究の着想の起点は、科学研究費補助金（基盤研究 B）平成 16 年度～平成 19 年度「授業記録の再構成と授業諸要因の抽出に関する実験研究」（研究代表者：的場正美）と科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）平成 20 年度～平成 22 年度「教育現象の叙述形式の構築に関する実証研究」（研究代表者：的場正美）にある。両者の研究の中心は、開発された記号を用いた現象を記述する形式性の解明である。この研究から次の問題が明らかになった。第１には、授業における発言や活動を命名（概念化）する場合に、解釈が入り込み、恣意性がある。それを克服する方法の１つは、記述の形式性に解釈を明示する方法である。第２には、活動や動作の記述は、解釈の明示性が担保されれば、限定的に記述可能である。第３には、記号による記述の形式性にはすでに分析単位が前提として含み込まれている。第１の問題点を第２、３の観点から実証的な検証を経て、理論的に克服できれば、現実の授業から抽出あるいは命名された要因を諸理論の概念と照応して子どもの認知、相互作用、教師の認識レベルで再構成できる可能性があるという着想に至った。

２．研究の目的

本研究は、以下の３段階をとる。

第一段階：現象を記述し、その解釈を通して、授業に関する諸要因を抽出する。

第二段階：現実を解釈するモデルである①認知心理学、②社会言語学、③活動理論、④認知論における諸概念の関連の解明を行う。

第三段階：以下の７の課題の解明を通して、第一段階で得られた要因と第二段階のそれぞれの理論における諸概念の関連を照応し、①授業過程において形成された子どもの認知(cognitive)レベルの要因の関連、②教師の認識（epistemic）レベルの要因、③授業過程の相互作用レベルの要因の関連を理論的に再構成し、授業過程の介在ないし作用する要因の関連構造を明らかにすることを目的としている。

課題１：プロトコルに表れた子どもの発言を若干補い、整理し、その発言の内容や概念の関係がわかるように、記号を用いて発言を再構成し、記号の形式と思考の形式の関係を解明する。

課題２：記号による表記がどの程度妥当性を有するか、その妥当性を、現象をどの程度再現できるか、その可逆性を検証する。

課題３：動作の記述可能性を検証する。

課題４：分析単位の妥当性を検証する。

課題５：イントネーション、ポース、スラッシュ、ターン単位、語、談話ペアなど分析単位の相互の位置関係を検証する。

課題６：記述形式にはどのような解釈が内在しているか、その明示性を検証する。

課題７：概念の命名の場合における抽象化の程度を事例的に検討する。

３．研究の方法

データの収集方法は、授業研究に関する文献収集、実験授業の実施による授業記録の収集、およびインタビュー調査による教師の反省記録の収集を行う。文献の分析方法は、語彙分析、解釈学的方法を、授業記録の分析は分節の構造分析や語彙の関連分析など授業分析の方法、解釈学的方法をおこなう。具体

的な分析手順は以下のようである。

(1)研究授業の立案・実施とデータの収集

本研究は実験活動、構成活動、表現活動、共同作業活動、討論など多様な思考様式が表れる実験授業を実施する。この授業を数台のビデオで同時録画を行い、つぶやきや隣の児童との対話や討論を録画・録音する。同時に観察者は、それぞれの役割に応じて授業観察、記録する。授業後、記録をもとに協議会を開催し、そこでの討議過程を記録する。

(2)記号の開発と非言語行動の記述の試み

現在の記号では記述できない事例の発掘を試み、記号の開発をする（課題１）。現在45の記号があるが、１つ記号が加わることは、そこに新しい思考様式が表出することである。多量に発掘されることはないが、見通しとしては、感情や意図などパラ言語を表記する記号を必要とする（課題３）。

(3)検証のために資料の蓄積

スラッシュ単位、隣接ペア単位、談話セグメント単位に関する資料を蓄積する。特定の場面を例に分析単位の一致の幅とその傾向を検証する（課題５）。同時に、要因と分析単位の関係を検証する（課題４）

(4)可逆性の検証

可逆性の検証は、特定のゼミ学生に依頼し、記号による記述方法とルールの訓練の後に、記号による記述をもとの発言に還元する問題の分析をする（課題２）。

(5)解釈の明示性の検証

記号によって表記された発言を記述の形式性がもつルールに従って解釈し、もとの発言と比較し、どのような可能性の解釈から１つが確定されたかを検証する（課題６）。

(6)抽象化の程度の検証

これまで抽象化され、命名された事例を分析し、その抽象度の程度を検証する（課題７）。

４．研究成果

研究課題に対応して、研究成果を述べると次のようである。

(1)課題１：記号の整理と開発

1993年に開発された記号は40であり、2002年に新たに５の記号が追加された。これらの記号は、2002年に石原正敬によって、７のグループに体系的に分類された。2009年にこの記号と分析単位との関係を考察した結果、次のことが解明された。02)概念・活動、構想、例示を示す記号、具体的には、001)(　)（概念や活動を示す)、002)〔　〕(構想を示す)、003)［　］（例示を示す）が分析単位になっている。構想を示す亀甲括弧は考えの内容が解釈の対象になる場合、概念を示す丸括弧や例示を示す角括弧に区分される。03)概念・活動、構想、例示の同一、差異、包含、類似関係を示す記号の場合、関係の表示は精神活動のレベルを示している。

2012 年に記号と示された具体例の対応関係を検討した結果、一部の記号の修正が必要であることが解明された。例えば、01）肯定、否定、疑問を示す記号グループの場合、015)→？人（ある人に対する疑問）と 017)→？人〔　〕（ある人の〔考え〕に対する疑問や質問）の区分と整合性が問題である。03)概念・活動を示す記号グループの場合、004)=（～である。もしくは、～という属性を有している)は 006) ⊃（含む）と混同される場合がある。05)動詞を含む記号グループの場合、027)A・動詞（A が主語を示す）と 028)A-動詞（A が目的語を示す）を用いて、主語、目的語、動詞の文章を記号で示す場合に記号の位置と順序に非規則性が生じる。

2007 年に新しい記号を開発する萌芽が形成され、2009 年と 2013 年に検証された記号は次のものである。

046) 『A』／（人物)〔B〕

(A という特定の概念、アイデア、構想について、ある人物が B という意味ないしイメージを込めていることを示す)

(具体例)茜 29:手術ができる二足歩行ロボットができると思います。

(変換例)茜 29:思う〔『二足歩行ロボット』／（茜)〔手術ができる〕・できる〕

この事例では、茜の有する二足歩行ロボットへの手術ができるというイメージが記号によって顕在化されている。

分析は次の手順をとった。①発言を選択し、発言の背景を説明する。②発言の整理：補足した部分は（　）で示した。③発言内容を前後の文章を参考にして解釈する。その解釈内容は「　」で示した。④重要と判断する語や句を意味単位として区分した。区分はスラッシュ（／）で示した。⑤意味単位を分析単位としてその関係を記号で記述した。

(2)課題２：子どもの発言を解釈し、その解釈を記号によって表記する場合、記号の形式の論理計算の順序性を前提に第３者が再解釈する事例が見られた。それを回避するために、強調したい語句を最初に置く、後ろの語句が前の語句を限定するなど一定の規則性を設けることが記述形式に必要であることが解明された。

2008 年と 2009 年に総計 400 事例の中間項によって記述された文章を元の発言に変換するデータを収集したが、充分な分析には至らなかった。2006 年実施のデータを再考すると、03）グループの 006)A⊃B の場合、例えば（もよう）⊃（花柄）は「花柄はもようです」「花柄には模様が含まれる」「花柄のもようがある」などの複数のパターンがある。一方、06)後者による前者の限定を示す記号グループで、ii）異なる基本括弧の連続と他の記号によって、後者が前者の内容を示すグループの　047)by(A)>>>［B］(C)（A という行為によって、B という事例の C つまり概念・活動・性質が明らかになる)の場合には元の発言に換言される割合が多い。

(3)課題３：2013 年度に、特別支援学級の生活の時間の授業単元において、言語記録とともに活動や行動の記述を併記した記録を

作成した。その記録をもとに授業実施2週間後に授業分析会をその学校の教師と実施した。その結果、討論と解釈の深まりに行動の記述が重要な働きを有することが観察されたが、実験的に実証はされなかった。

行動の記述を第3者が解釈し、その解釈にもとづいてその第3者が行動を再現する。そして、記述された行動が再現されれば、記述が妥当であるという検証方法は、どのような文章理解が行動を再現する第3者の内部でなされたからは問われない。これに対して、行動を記述する人の解釈の方向と内容を記述形式に明示する方法が行動の記述の可能性として提案できる。動作の記述の動作の再現は受け取る人の解釈およびイメージに依存しているので、記述形式の解釈の明示性と非言語的行為の関連を実証的に検証することが残された課題である。

(4)課題４：例えば他者の考えの推察の場合には（⇒人〔考え〕）で表記しているが、ここでの表記の形式性は、①関係性、②構想が分析単位として抜き出されている。そして、特定の重要な意味をなすものとして討論されている語が分析単位として示されている。この例のように、分析単位が記述の形式性に明示されている。

分析単位の妥当性は解釈と関係する。そこには次の関係がある。①分析単位は解釈者が重要と思う意味単位で区分される。②分析単位の関係は記号を用いた記述言語としての中間項の形式に明示される。③解釈は、情報の圧縮と抽象化を伴うが、常にもとの解釈資料への参照性と可逆性を必要とする。記号による解釈内容の明示性がその基礎になる。

(5)課題５：観察時に記録するために、会話分析の成果を利用して、音韻を示す記号として、①::: 引きののばし、②-:中断、③. :尻上がり抑揚、④？：尻上がり抑揚疑問、⑤逆？：逆、⑥（）間を、割り込みなどの行動を、①［：２人同時発言、②］：発言同時終わり、③／：介入発言、活動、そして観察者の補足の略記号として、①ph:写真記録あり、②d：指示語補足、③ g：予測、④f：感想、⑤ad:観察後記録を用いてきた。しかし、これらの記号は授業逐語記録を再構成するためには未だ用いられていない。

(6)課題６：解釈内容は、記述形式に明示される。例えば、「わたしもみんなといっしょで、野菜や果物というのは、すごくたくさん種類があるので、どれにするのか迷っています。」というある子どもの発言は次のように表記される。（自分の考え）＝（みんなの考え）〔（野菜や果物の種類・たくさん）∴（選択−迷う）〕。この表記の場合には、みんなの考えは、野菜や果物というのは、すごくたくさん種類があることだと解釈されている。一方、みんなの考えが「どれにするのか迷う」ことであると解釈をする場合には別な表記になる。(1)課題 1 で示した二足歩行ロボットに関する発言を二足歩行ロボットができることを強調すれば、次の記述形式になる。

29 茜：思います（手術ができる二足歩行ロボット・できる）

解釈された内容が形式に明示されている。

子どもの発言の解釈は、発言の文法的な解釈のレベルだけでなく、問題解決の過程や課題解決の過程、あるいは思考傾向を考慮して解釈されるレベルがある。後者のレベルを明示するには、問題の発生状況を示す記号、解決の方向を示す記号など新たな記号の開発が必要とされる。

(7)課題７：記録、発言の再構成、そして要因の抽出という段階において、発言を再構成する記号の形式性に、要因を命名するレベル、つまり、(概念)、［事例]、〔構想〕のレベルがある。また、WN(　),(　)のような記号と記号の関係を示す形式性に認知レベルの要因がある。しかし、記号を用いて発言を再構成する段階で、要因を抽出する先取りとしての解釈が含まれる。この問題の克服には、課題６の記号による解釈の明示性を示すことが必要となる。

(8)新たな展望と残された課題

顕在している発言の背後にある概念ないし要因の抽出が事例分析を通してなされた。発言事例と記号を用いて記述され、整理された内容を示すと次のようである。

①発言事例：藤子(18)：／人数的にはもっと多くの幸せとかを／考えるんだったら／４１９の四車線化を／早くつくった方がいいと／行政は／思ったのかなと／思いました。（下線は注目された発言）

②記号による変換：IF（考える）〔人数的にはもっと多くの幸せとか〕,〔[４１９の四車線化](早くつくった方がいい)〕

③ここには次の展開が示されている。

「人数的に多くの幸せ」→「四車線化を早くした方がいい」

④この発言には次の概念が顕在化している。

「多くの人の利益」→「四車線化の優先」

そして、この２つの概念は『公共の福祉』という概念を媒介としている。

＊記号の説明

→１つの展開・変容等の過程の方向を示す。

IF(A),(B)A という条件が満たされるならば B であることを示す。

(A)〔B〕B はA という概念・活動、性質の内容を表す。

[A](B)A という事例が B という概念・活動、性質を有している場合を表す。

＊新記号

「A」発言から抽象化された要因を表す。

『A』内在している概念、ないし想定された要因を表す。

新たな研究課題として、仮説形成法は仮説を相対化できる。その相対化の妥当性を検証するためにアブダクションと仮説形成法の関係を吟味し、仮説を重層的に形成し、選択肢を比較することによってできるという見通しを得た。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 8 件）
（１）学術雑誌（計 6 件）
①的場正美（2014）「授業分析にける分析単位と解釈の機能」東海学園大学『東海学園大学紀要–人文科学研究編』19、pp.115-135。(査読無）
②的場正美、柴田好章、水野正朗、中嶋淑子、堀田貴之、近藤茂明、福村美希、新谷　裕、須田昂宏、埜崎志保、丹下悠史、付　洪雪、伊倉剛（2012）「子どもの発言に内在する授業諸要因の抽出に関する事例研究」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第５９巻第１号、pp.12１-149。（査読無）
③Sarkar Arani Mohammad Reza, Tomita Fukuyo, Matoba Masami, Saito Eisuke & Lassegard James(2012)Teachers' Classroom-based Research: How it Impacts their Professional Development in Japan, In. *Curriculum Perspectives, Quarterly Journal of the Australian Curriculum Studies Association* (ACSA), Vol.32, No.1, pp.25.-36.（査読有）
④Masami, Matoba(2010). Lesson Analysis for Sustainable Lesson Study. In. Bulgarian Comparative Education Society. *Comparative Education, Teacher Training, Education Policy, School Leadership and Social Instruction*. pp.121-126.（査読有）
⑤的場正美（2009）「授業分析における現象の記述形式」『 名古屋大学大学院教育発 達科学研究科紀要(教育科学)』第56巻第２号、pp.55-66。（査読無）
⑥的場正美（2009）「授業分析における分析単位と記述形式」『 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』 第 56 巻第 1 号、pp.30-36。（査読無）
（２）雑誌・報告論文（計２件）
①的場正美(2011)「教育実践をどのように記述するのか、そして教育実践の何を解釈するのかー研究集会の論議経過のまとめー」日本教育方法学会編『教育方法学の研究方法論教育実践の記録と解釈』（日本教育方法学会第 15 会研究集会報告書)2011 年６月 19 日、pp.42-45。
〔学会発表〕（計 30 件）
（１）招待講演（計 8 件）
①的場正美(2011)「授業研究は教師と学校をどのようにそだてるか」（北海道教育研究所連盟主催、網走大会、網走市、2011 年９月８日。
②的場正美（2011）「授業研究による教師の成長 -教育学の知を創造する授業研究の構築-」日中韓における教員資質向上のための国際共同研究：文部科学省委託事業、広島国際会議場、広島市、2011 年１月 30 日。
③的場正美（2011）「世界に広がる日本の授業研究−世界の動向と日本の方向-」愛知淑徳大学平成 22 年度第８回文学部講演会、愛知淑徳大学、名古屋市、2011 年１月 20 日。
④Matoba, Masami (2010). "Lesson Analysis: Purpose, Process and Product", presented at the Lesson Study Symposium with 3rd APS Global Education Conference 2010, organized by Academy of Principals, the Suntec Singapore International Convention & Exhibition Centre, Singapore, 4th. Jun, 2010.
⑤的場正美（2010）「日本における授業研究の方法と特徴 -共動してつける授業力と授業研究-」全州教育大学校企画講演会、全州教育大学校、韓国、2010 年 10 月 18 日。
⑥ 的場正美（2009）「授業研究と孔子のため息」、全国教育研究所連盟第 19 期共同研究 第 3 回全国研究集会 (山形大会)、記念講演、2009 年 11 月５日、山形テルサ、山形市。
⑦ Matoba, Masami(2009)."Lesson Study in School as Organization that learn "（日本語題目：学びの共同体としての授業研究 ） , Surabaya, Indonesia ,20, August,2009.
⑧Matoba, Masami(2009)."Sprit and Approach of Lesson Study"（日本語題目：授業研究の考え方と具体的な進め方 - 授業研究の精神 -）, Surabaya, Indonesia , 18. August,2009.
（２）国際学会（計 10 件）
① Masami Matoba(2013). "Critical Praxis Inquiry of Pedagogical Efficiency: From Lesson Analysis Perspective", the International Conference of World Association for Lesson Studies 2013. 7.September 2013. University of Gothenburg, Sweden.
②Matoba, Masami (2012). " Lesson Analysis for Creating Professional Knowledge in Practice ", The 3rd East Asian International Conference on Teacher Education Research. East Normal University, Shanghai, China, 7. December, 2012.
③Matoba, Masami (2012). "Lesson Analysis for Changing Landscape of Research on Teaching ", the World Association of Lesson Studies: International Conference 2012. National Institute of Education, Singapore, 29. November, 2012.
④Matoba, Masami(2011). "Lesson Analysis for Sustainable Lesson Study", Graduate School of Education Peking University, Beijing , China, 22, Jun, 2011, Work Shop.
⑤Matoba, Masami & Yoshiaki Shibata(2011). "Evidence-based Lesson Analysis in Japanese Educational Research Tradition", the World Association of Lesson Studies: International Conference 2011. University of Tokyo, Tokyo, Japan, 27. November, 2011, Work Shop.
⑥ Matoba, Masami(2011). "The Classroom Inquiry Schemes: Rethinking Lesson Study from Global Perspectives", the World Association of Lesson Studies: International Conference 2011. University of Tokyo, Tokyo, Japan, 26. November, 2011, Open Forum.
⑦Matoba, Masami(2010). "Teacher Professional

Development through Lesson Study", the 2nd East Asian International Conference of Teacher Education Research. The Hong Kong Institute of Education ,Hong Kong, 15. December 2010.
⑧ Matoba, Masami(2010). "Evidence-Based Lesson Analysis in Educational Research", the World Association of Lesson Studies: International Conference 2010. Universiti Brunei Daraalam, Brnei, 9. December, 2010, Symposium, In English.
⑨Matoba, Masami(2010). "Designing Teaching through Evidence-Based Lesson Analysis; Local Prospect for Global Problem", the World Association of Lesson Studies: International Conference 2010, Universiti Brunei Daralam, Brunei, 9. December, 2010, Symposium.
⑩ Matoba, Masami(2010). "Lesson Analysis: Purpose, Process and Product", the 8th International Conference on Comparative Education and Teacher Training, Plovdiv, Bulgaria, 10, Jun, 2010.

（３）国内学会（計 12 件）
①的場正美（2013）「授業研究における分析単位と解釈の関連性に関する事例研究」日本カリキュラム学会、第 24 回大会、上越教育大学、2013 年 6 月 6 日。
②的場正美（2012）「授業研究における解釈学− ドイツ政治教育の授業分析を事例として −」日本教育方法学会第 48 回大会、福井大学　2012 年 10 月 7 日。
③的場正美（2012）「ドイツ政治教育における授業分析の方法論」日本カリキュラム学会第 23 回大会、中部大学、2012 年 7 月 7 日。
④的場正美、柴田好章、水野正朗、福村美希、須田昂宏、新谷裕、伊倉剛（2012）「子どもの発言に内在する授業諸要因の抽出に関する事例研究」日本カリキュラム学会第 23 回大会、中部大学、2011 年 7 月 7 日。
⑤的場正美、柴田好章、新谷裕、須田昂宏、丹下悠史、埜崎志保、付洪雪（2012）「授業記録の解釈と概念化に関する事例研究」中部教育学会第 61 回大会、信州大学、2011 年 6 月 30 日。
⑥的場正美（2011）「授業研究における解釈過程の明示化」日本カリキュラム学会第 22 回大会、北海道大学大学院教育学研究科、2011 年 7 月 16 日。
⑦的場正美（2011）「ドイツ政治教育の授業記録の分析枠組みに関する事例研究 −NRW ギムナジムの授業実践分析を通して−」日本教育方法学会第 56 回大会、秋田大学　2011 年 10 月 1 日。
⑧的場正美（2010）「現代の授業研究における授業分析の位置と意味（公開シンポ）」日本教育方法学会第 46 回大会公開シンポジウム提案、国士舘大学、2010 年 10 月 9 日。
⑨的場正美（2010）「授業分析における解釈の明示性に関する研究」日本カリキュラム学会第 21 回大会、佐賀大学文化教育学部、2010 年 7 月 4 日。
⑩的場正美（2009）「授業分析における現象の記述形式 −現象の解釈内容の明示化　−」日本教育方法学会第 45 会大会、2009 年 9 月 26 日、香川大学教育学部、2009 年 9 月 26 日。
⑪的場正美（2009）「授業分析における叙述形式の検証　−記号による叙述の再現性＝可逆性の検証−」日本教育学会第会第 68 大会、東京大学駒場キャンパス、2009 年 8 月 28 日。
⑫的場正美（2009）「授業分析における分析単位と記述形式」日本カリキュラム学会第 20 回大会、神田外語大学、2009 年 7 月 12 日。

〔図書〕（計　6 件）
①的場正美・柴田好章編（2013）『授業研究と授業の創造』渓水社,p.359。
②的場正美（2012）「世界の授業研究」日本教育方法学会編『教育方法　41 東日本大震災からの復興と教育方法 ： 防災教育と原発問題』図書文化,pp.142-154。
③Masami Matoba (2011). Lehrausbildung in Japan: Lernen im Schulkontx am Beispiel der Lesson Studies. In, Mattias Pilz(Hesg.)(2011). Vorbereitung auf die Welt der Arbeit in Japan, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissen-schaftten.SS.89-106.（ドイツ語論文）
④ Masami Matoba (2011). Lesson study Perspective. In National Association for the Study of Educational Methods (ed.)(2011). Lesson study in Japan. Okayama: Kenshisha, pp. 433-448.
⑤的場正美（2009）「授業研究方法論の課題と展望」日本教育方法学会編（2009）『LESSON STUDY IN JAPAN　日本の授業研究』学文社、2009 年 9 月、pp.189-199。

６．研究組織
(1)研究代表者
的場　正美（MATOBA Masami）
東海学園大学・教育学部・教授
研究者番号：　40142286

(2)研究分担者
松下　晴彦（MATSUSHITA Haruhiko）
名古屋大学・教育発達科学研究科・教授
研究者番号： 10199789

柴田　好章（SIBATA Yoshiaki）
名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授
研究者番号：70293272

杉本　憲子（SUGIMOTO Noriko）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：70344827

(3)連携研究者
サルカル　アラニ　モハメッド　レザ
（Sarkar Arani Mohamamd Reza）
帝京大学：教育学部・准教授
研究者番号：30535696